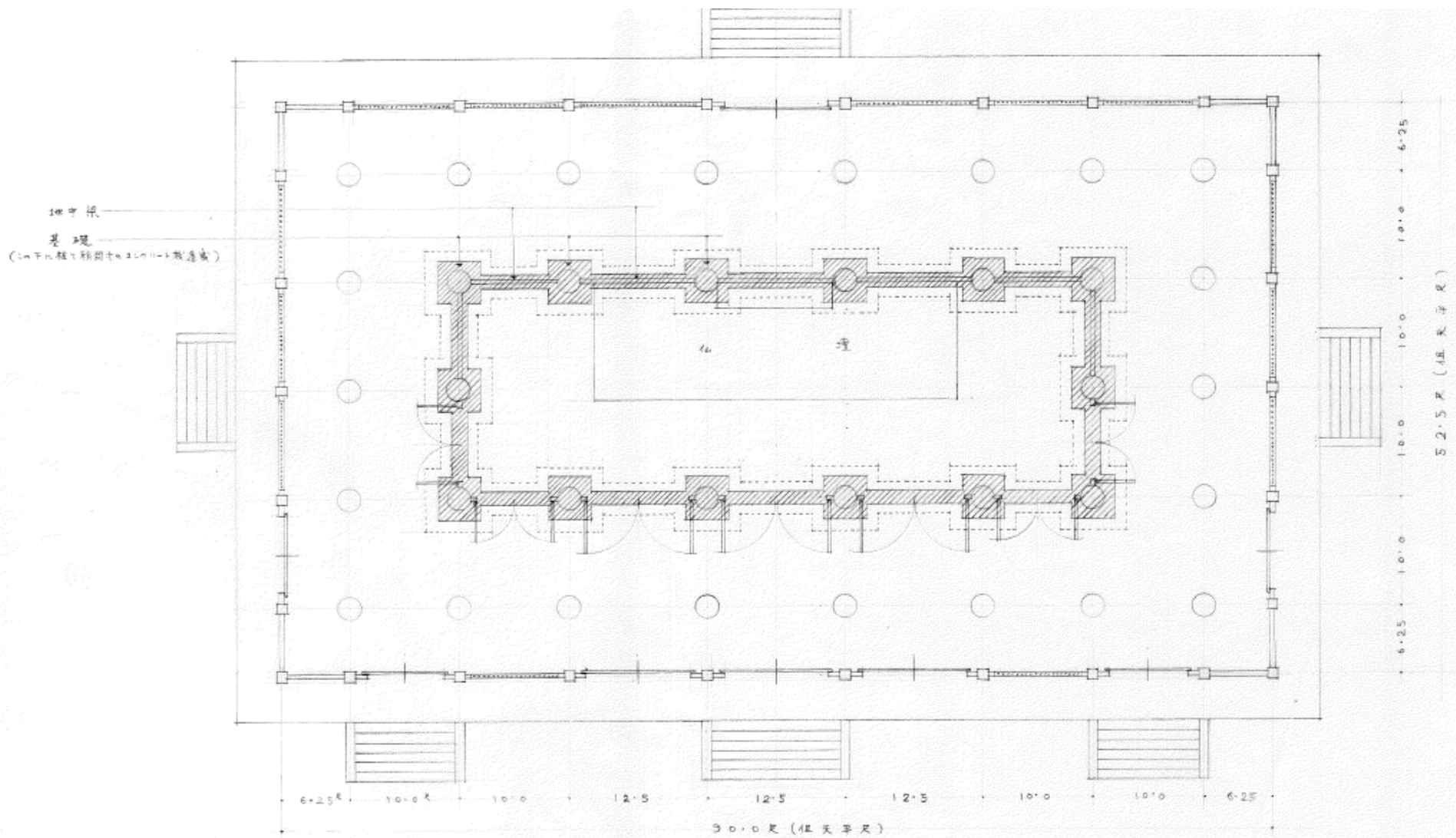


[薬師寺金堂]見学レポート

大講堂より金堂を望む(左が東塔、右は西塔)



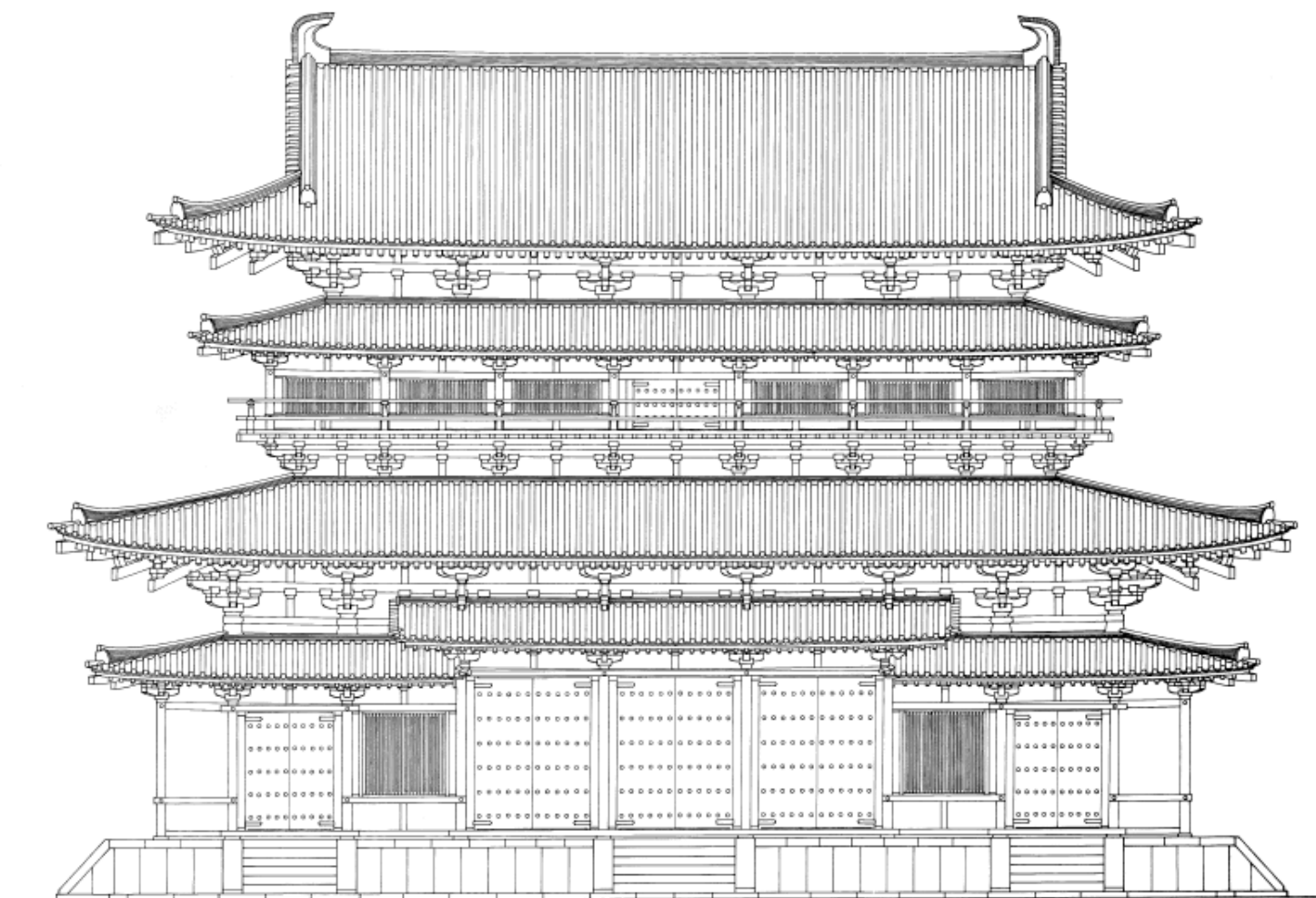




兼好寺金堂復元平面図 5. 1:100 取・44・9・11. 罫

大岡實直筆の復元平面図

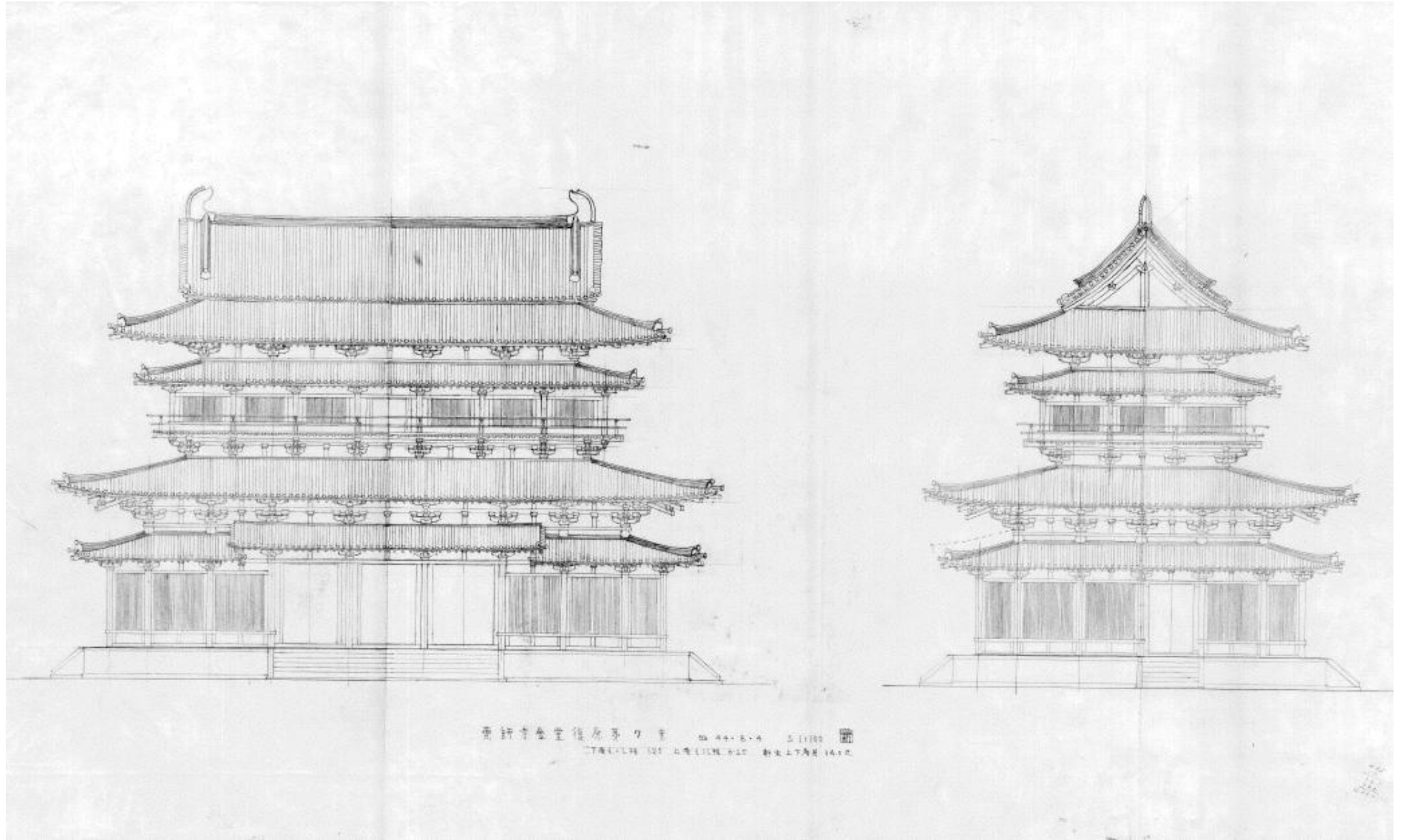




正面立面图



鍔葺案もある



大岡實直筆の復元平面図

















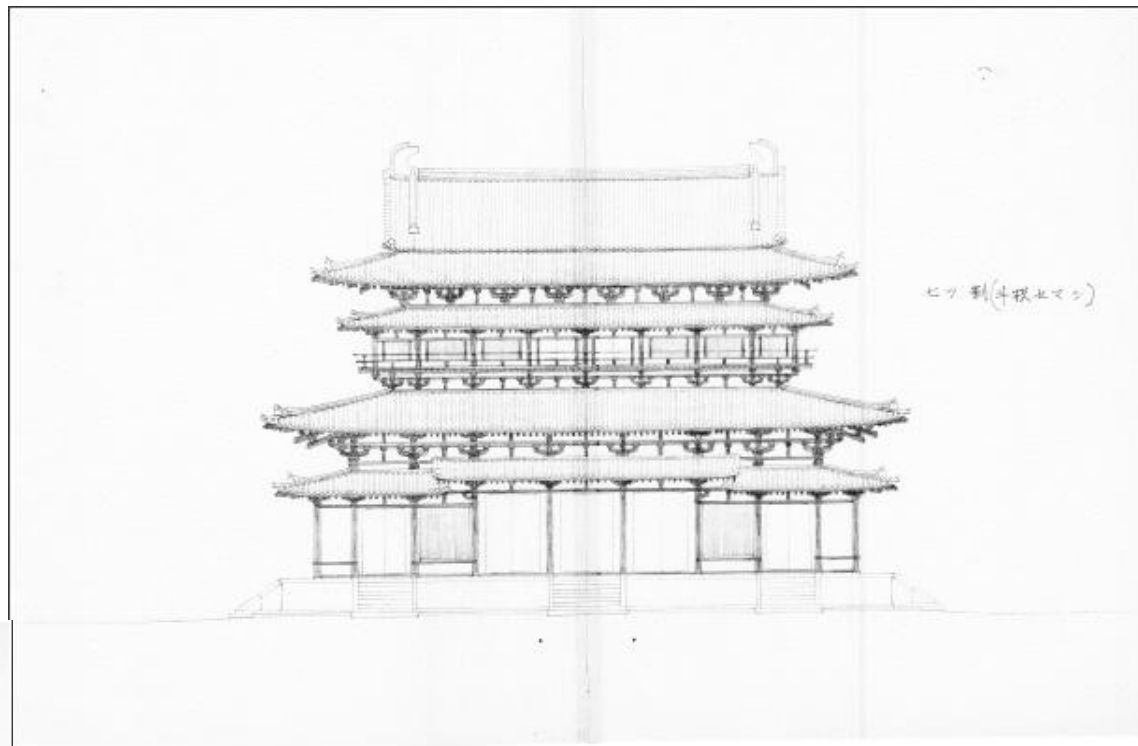
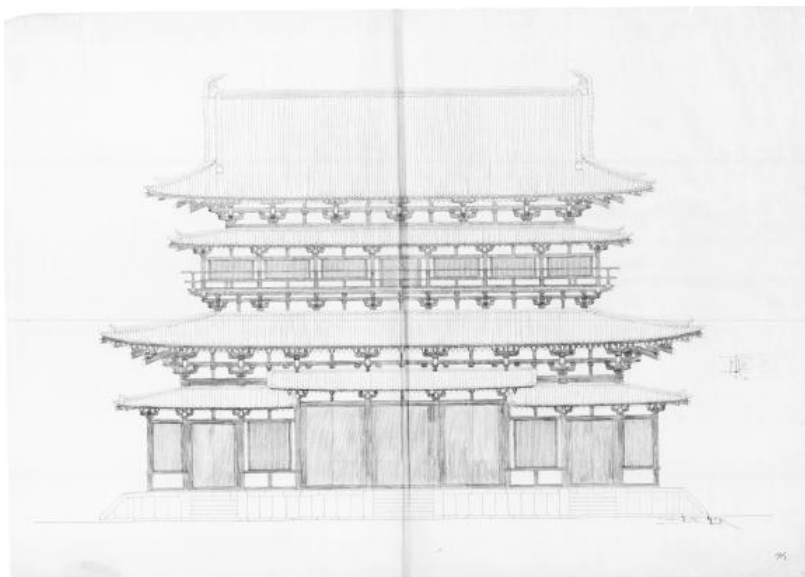


地円飛角の垂木



大棟の鴟尾





さまざまな計画案

左上 六ツ割

左下 妻面三ツ割(鍔葺)

上 七ツ割(鍔葺)

金堂

金堂は享禄元年(1528)この地域の豪族の戦火に巻きこまれ、西塔などと共に焼け落ちてしまいました。その後、豊臣家が金堂の仮堂を建て、その後本格的な金堂の再建に取りかかる筈でしたが、豊臣家滅亡などの事情で400年近く仮堂のままの状態でした。

金堂の再建は歴代の薬師寺住職にとって悲願中の悲願でした。昭和42年(1967)高田好胤師が晋山し、百万巻写経勧進による金堂再建を提唱、全国に写経勧進に歩かれ、その結果昭和46年(1971)金堂の起工式を行い、そして昭和51年(1976)4月に白鳳時代様式の本格的な金堂として復興しました。



(インターネットより引用)

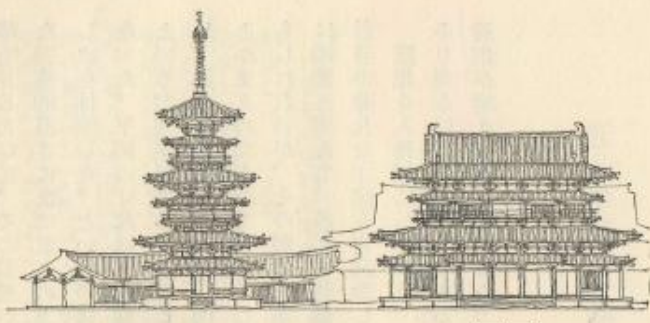


聖徳太子の遺蹟 金堂（左）と東塔（右）
▲金堂正面西側

「斑鳩の匠 宮大工三代 西岡常一/青山茂」より引用

薬師寺金堂復元設計の意図(大岡實「日本の建築」より)

薬師寺の建築



挿図24 薬師寺伽藍塔内



景観復元図

2 薬師寺建築の特殊な形態とその造形(口絵四〇、二四)

伽藍配置は、すでにのべた薬師寺式伽藍配置で、二基の塔が金堂の斜め前方に建っている形式で、その東の塔が現在のこつている。ところがこの塔の形態は、きわめて特異である。すなわち三重塔であるが、その各々の重にも、こし(庇)がついていて、一見すると六重に見える。そしてこの意匠の非常にすぐれたものであることは、誰もがみとめているが、薬師寺伽藍の主要部分が、全部この東塔の様式でまとめられていたことは、あまり知られていない。

薬師寺の金堂が二重で、しかも各重にも、こしがついていて、全体が四重のように見えたことは、一二世紀に、実際にこの塔を見て書いた、大江親通の『七代寺巡礼私記』の記録によつてあきらかである。講堂は一重であるが、やはりもこしのあつたことが縁起その他でよくわかる。

いま人びとは、東塔一基を見て感心しているが、廻廊にかこまれた金堂の一郭が、東塔とおなじ意匠でまとめられていたのであるから、いかにその景観が華やかであり美しかったかは、まったく想像にあまるものがある。二四図は、不十分であるが、これによって多少の気分はわかるであろう。おそらくこの意匠は、奈良時代でも異色であり、画期的なものであつたろう。重厚で力強くはあるが、細部にぎこちなさをもつた飛鳥系の建築から、すみずみまで洗練された奈良本朝へうつりかわる先駆をなしたものであり、当時の人びとが非常に賛美したと想像される。このために飛鳥地方から移った他の寺院が、新京で新様式で建立されたにかかわらず、この薬師寺だけ、旧のままの様式で建立されたのであろう。私は東

塔を見るたびに、その着想がじつに奇抜であると同時に、あの奇妙ともいえる形態を、あのような芸術的高さにまでまとめ上げた設計者の手腕を感心していたが、先年、私は実際にそのむずかしさを体験した。というのは薬師寺金堂復元の計画があり、こころみに私が復元図をかくことになった。平面の寸尺は、創建の基壇、礎石が残っていて、はっきりわかるし、その意匠には東塔というお手本があるから、これ等をまとめて屋根をのせればよいと思つて、とりかかった。しかし、とりかかってみると、何としても形がとれず、じつにむずかしい。二四図は苦心の結果、何とかまとめたものである。この図をかかげることによつて、かえつて世をまよわす結果になるかもしれないが、その形が、あまりにも異例であり、いっばんの方々、その形態を想像することは困難と考へて、あえて想像復元図をのせた。しかし、この図をかいた結果、つくづく薬師寺設計者の非凡な才能を再認識したのである。

屋根を入母屋にしたのは、寄棟ではどうしてもおさまらないからであつて、私は入母屋以外にあり得ないと考へたのであるが、その後、前にのべたように廻廊内の金堂が入母屋であるという通則が考へられるようになったので、一層その確実性を増した。

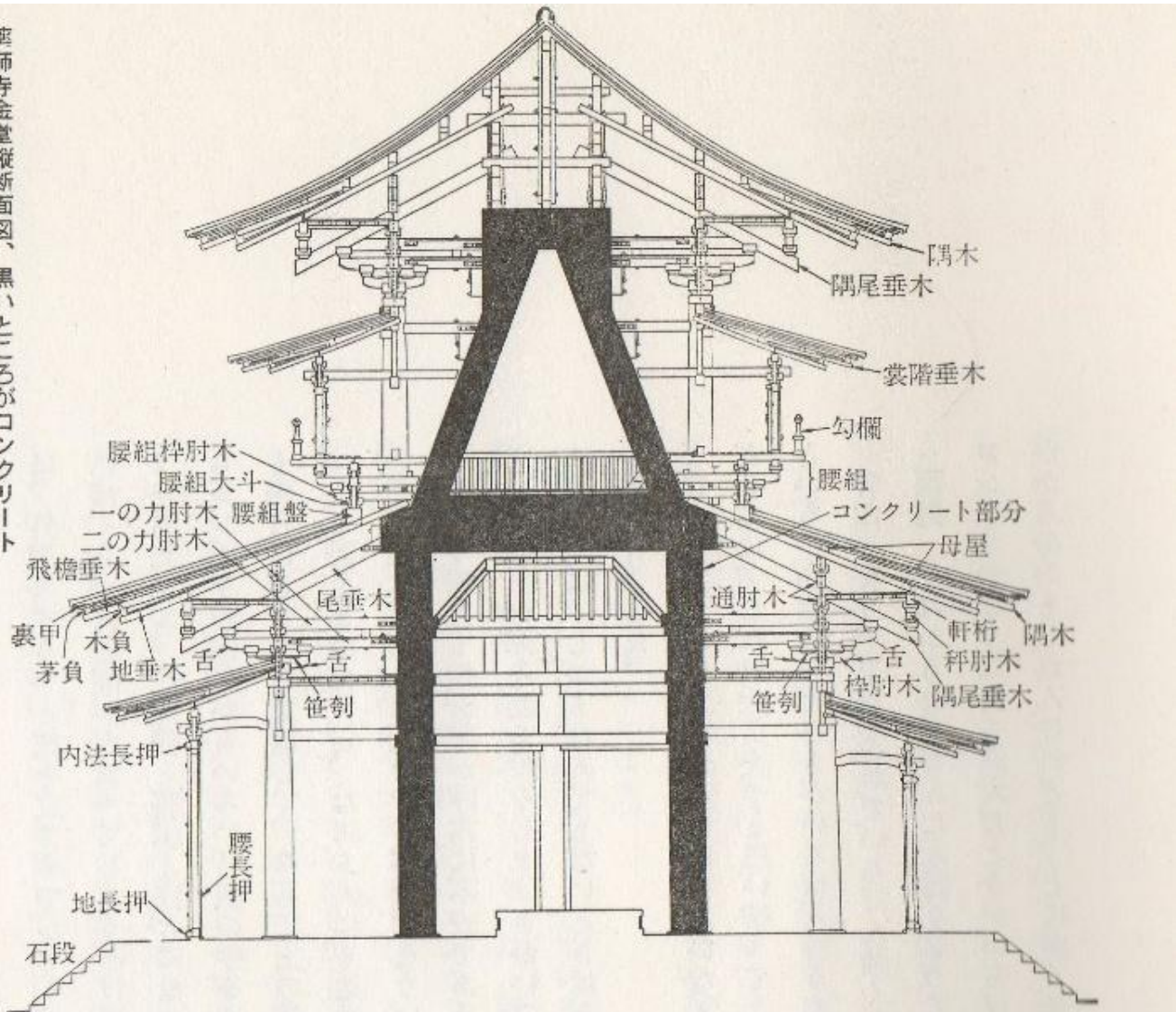
「斑鳩の匠 宮大工三代 西岡常一/青山茂」より抜粋

- (西岡) 大岡実さんの基本設計はできておるけれども、具体的に新たに実施設計というやつをそれらの実測調査(東塔の規矩・木割等の実測調査のことをさす)をふまえて、もういっぺんしてみよう、とそういうはなしやったんですな。
- (青山) 第一次の設計図というのは、大岡実先生のはじめの基礎設計をもとにして、浅野清先生と現場棟梁の西岡さんが、塔を実測調査したのを参考にしてつくられた実施設計ということですね。
- (西岡) ところが東塔の図面と第一次の実施設計図とをくらべてみますと、金堂の棟の高さが塔の高さの六割五分ぐらいになるんです。そうすると、鴟尾をつけるとすれば、塔の露盤の下まで鴟尾がいつてしまう。それは待てよ、なんぼなんでも東西っ両方に塔があっても、これではちょっと不均衡や。いろいろ考えた結果、東西両方に塔があるんやから、結局は塔の三重の屋根の下と金堂の棟とがつながるといのが伽藍として調和するやないか。高さとしてはそのくらいのもんじゃないかと思うて、だいたいそれくらいにして寸法を測ってみますと、約六割になるんです。塔のな。私はこういう考えをもっているんやがそれぐらいでどうでっしゃろうか、ということをお願いしたら、大岡先生が第一番に賛成されて、そうだぼくもそう思っているんだ、第一次の実施設計ではちょっと高すぎる、なんとかこれを低くすることはできんかと思っていたんだ、という。ところが、この第一次の実施設計図は精密に実測したデータを積み上げたもんやから、どこか一カ所で下げるところがあるや、それでいろいろ工夫をして棟をちょっと下げ、ほうぼう寸法を少しづつ小さくして一メートルほど下げたんですわね。
- (青山) あの模型(薬師寺金堂の十分の一の模型)をその当時、私も二、三度見せていただいたし、現在も残っておりますが、それを見ると、二層目というんですか、上層部で、柱間の数とか屋根の形式、軒の納まりぐあいなどをそれぞれ各方向別々の違う形式にしてある、あれをちょっとくわしく説明していただきたいんですが。
- (西岡) あれはね、やっぱり学者の先生方の意見の相違でね、ああなったんですわ。浅野さんは妻のほうの方が狭いんでもう一間ふやして、ちょっとでも奥行きを広うしようという感じ。実際、妻のほうから見ますと狭い感じなんです、あの金堂。だから真東のほうから見れば、塔が二つあるように見えるというんで、少しでも幅を大きく感じさせるために、そういうふうを考えられたんですけどね。
- (青山) それには柱もふやすわけですね。一筋多く。
- (西岡) ええ。そのほうが木組みのうえではぐあいがいいんです。真中一つよりも、柱二本にしたほうが木を組むうえではぐあいがいい。内部の組み方が。ところが太田先生なり大岡先生なり、いろいろな先生方の意見では、それはどうもおかしい、と。下の柱から上の柱は少しづつなかへ寄って立っていくのがふつうやと。ところが一間ふやすと、上の柱のとおりが外へ寄ってしまう。それでは格好が悪いという意見です。だから、模型の東西の妻は、その二つの意見によって形式を違えてつくってあるんです。そして結局は一本抜いて一間へらした形式で建てることに決定したわけです。模型ではそんなにわかりませんが、実際にやっぱり出来上がってみると、一間少ないほうが安定感があります。こまこまするとコチャコチャしすぎてかえって悪いですな。

- (西岡) 屋根の形式は、大岡先生は玉虫厨子になって鑿葺きにと、白鳳は鑿葺きやろというんで鑿葺きを主張されたんですけど、法隆寺の金堂も、学会では以前は鑿葺きやということになっていたんですけど、やっぱり入母屋であった。だからだいたい法隆寺の金堂も白鳳やし、これも白鳳やから入母屋のほうがいいんじゃないかということで入母屋にした。それから妻に関しては、法隆寺の金堂が非常に参考になつとるわけですね。そして設計の段階で同時代の、いまの海竜王寺の五重小塔とか白鳳前後の建物をよく調べて、いろいろ参考にしたわけですね。
- (青山) で、模型をそれぞれ検討なさって、最後にこれでいこうという決定がなされたわけですね。
- (西岡) それがちょうど四十六年の五月の中旬ごろやったと思います。最後にきまったのが。そのまえに東京の三越で模型が展覧されて、そこで委員会が開かれ、棟の高い低いとか、柱間を増やすかどうかということが問題になって、そして、五月の十六日に現地でもういっぺん委員会をやろうというんで、それまでに一メートル下げた図面を引いとけというんで、大急ぎで一メートル下げた図面を引いて見てもらったわけです。そこで最終的に決定したわけです。

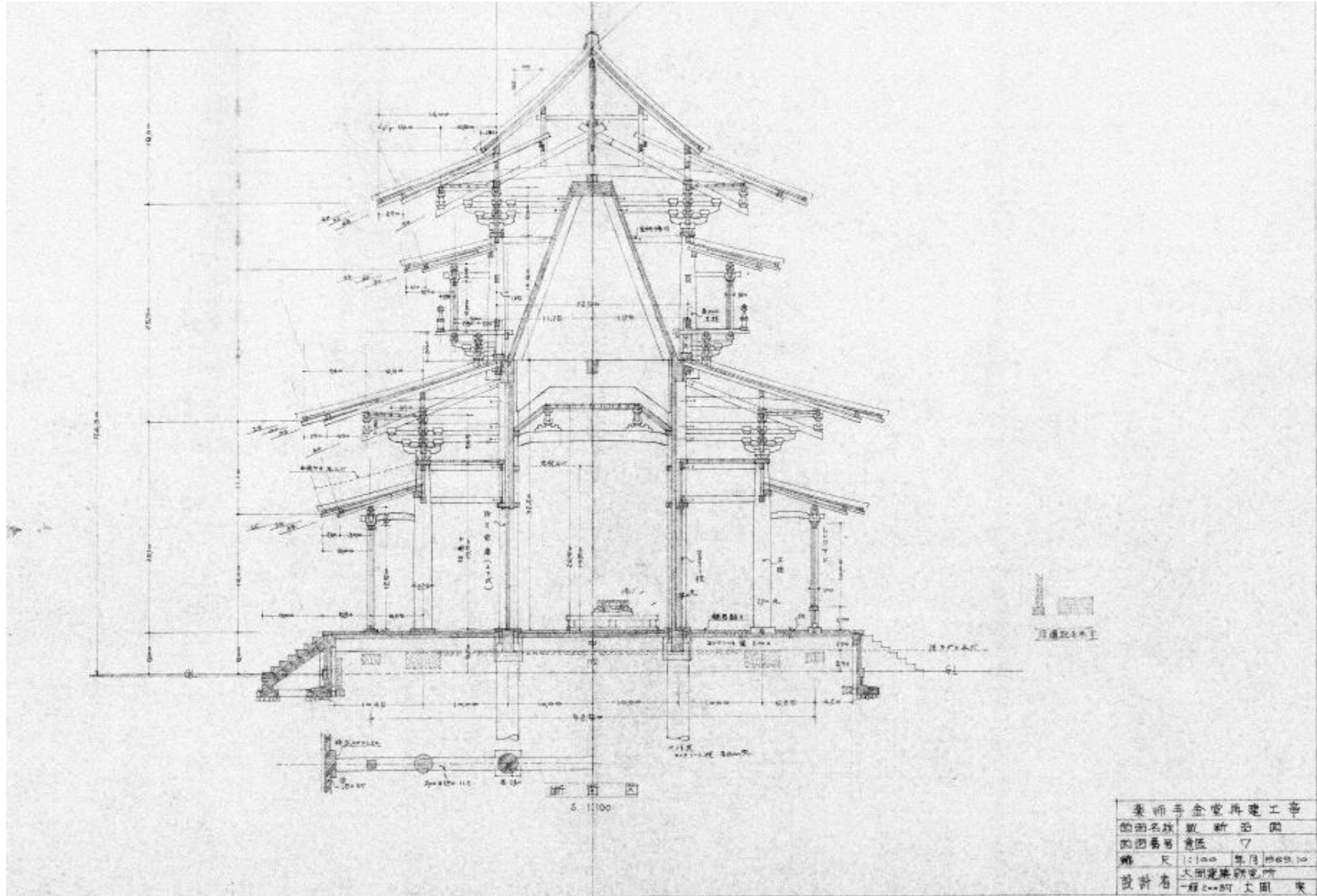
(下線は筆者による)

蓮師寺金堂縦断面図、黒いところがコンクリート

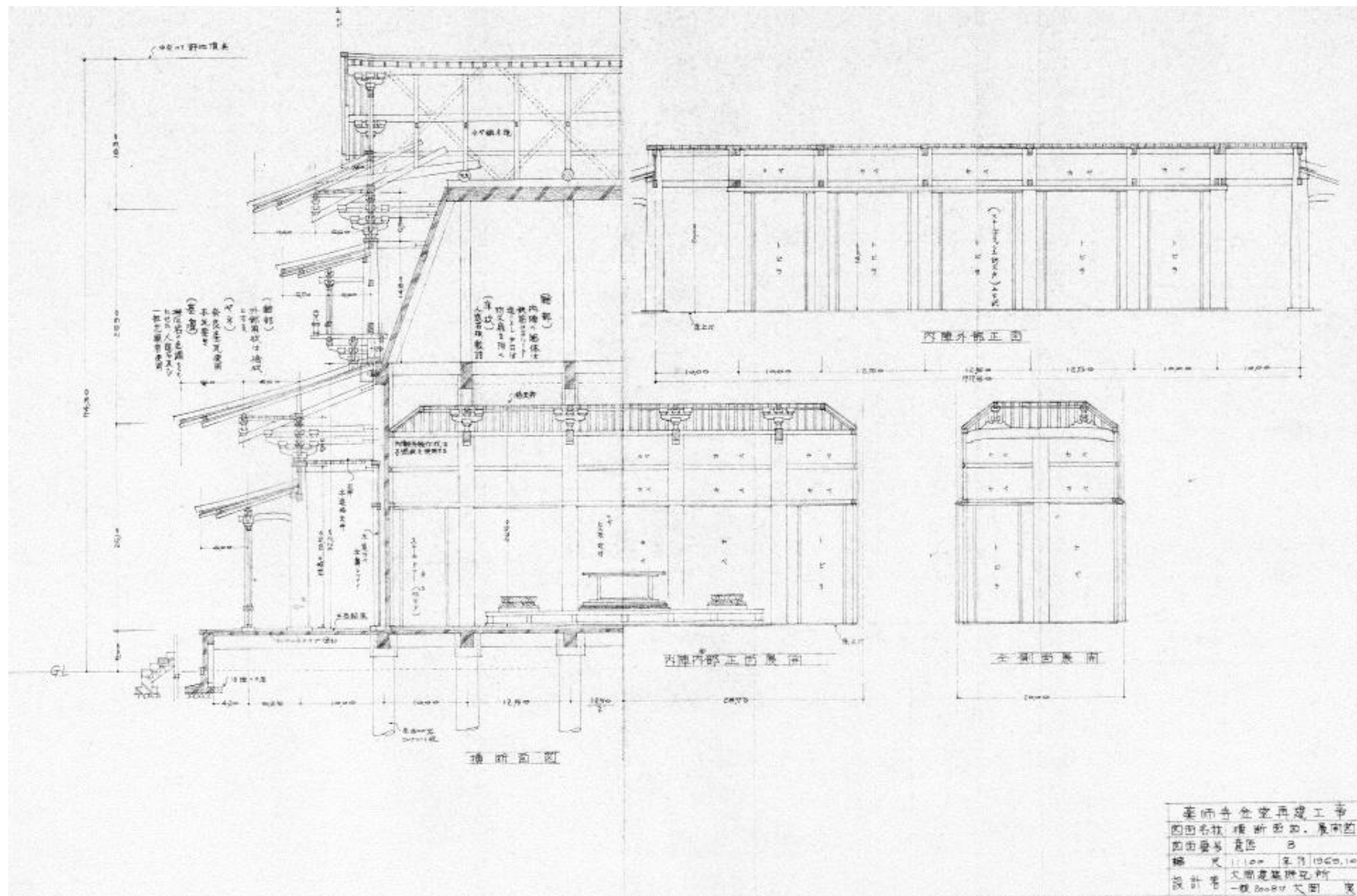


黒い部分がRC造

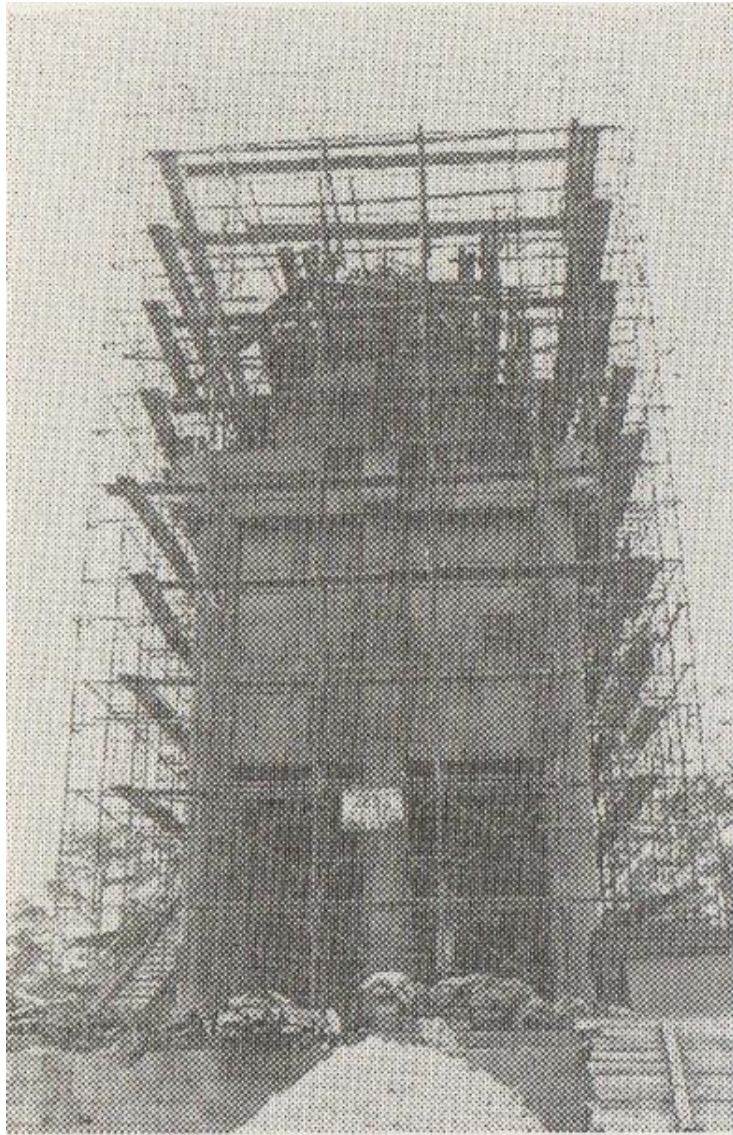
「斑鳩の匠 宮大工三代 西岡常一/青山茂」より引用



鍔葺になっている

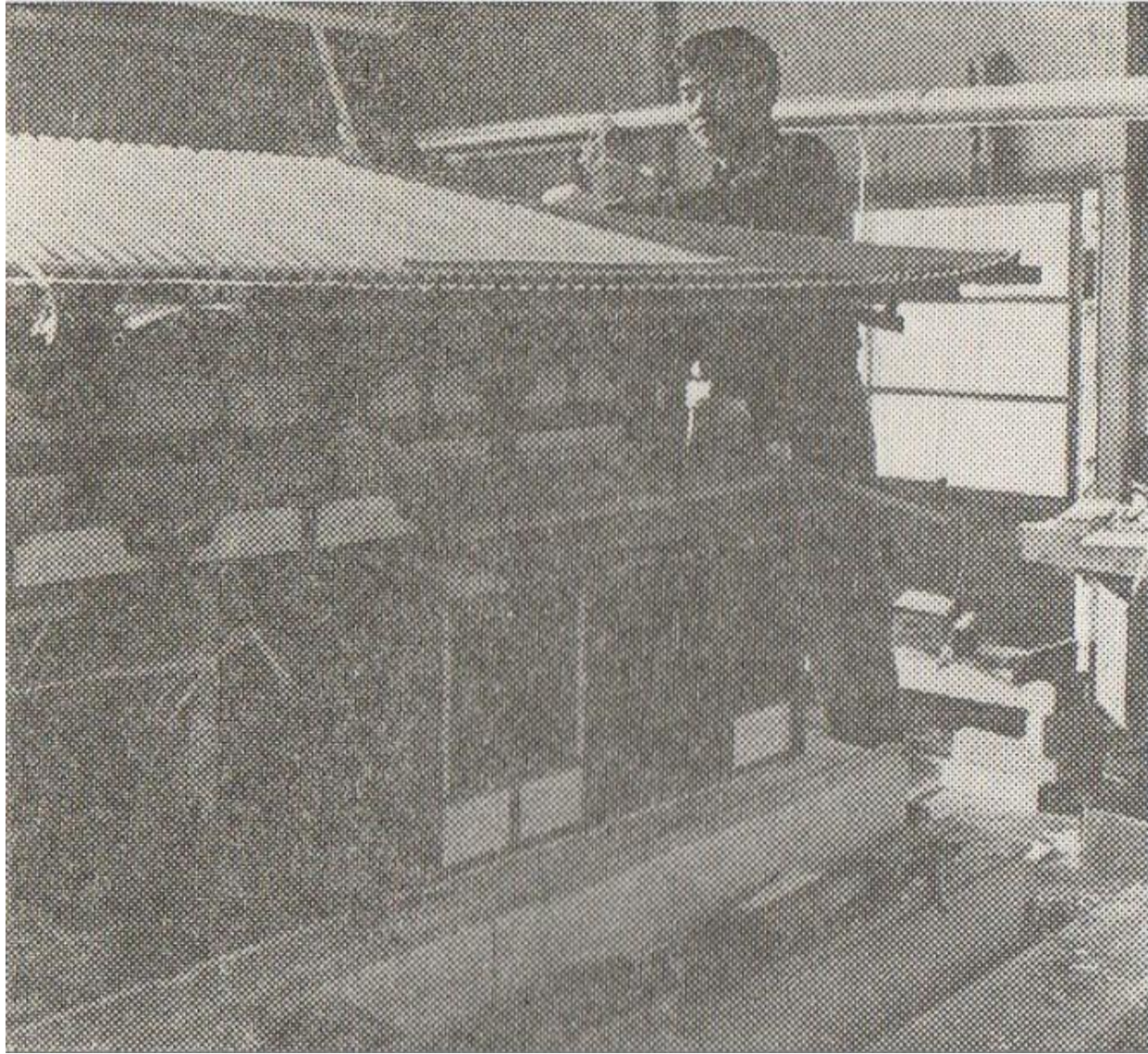


断面図



内陣のRC躯体工事中

「斑鳩の匠 宮大工三代 西岡常一/青山茂」より引用



模型制作

「斑鳩の匠 宮大工三代 西岡常一/青山茂」より引用

(参考)

大岡實は薬師寺金堂の復元に当たっては「基本設計」ということになっているが、提供した薬師寺金堂復元設計図としては以下の図面がある。
正面パース、正面図、断面図、初重平面図、二重平面図、天井見上図、小屋伏図、南北断面図、東西断面図、初重各立面図、二重矩計図、初重背面矩計図、初重正面矩計図、小屋断面図、斗拱詳細図、二重庇詳細図、鴟尾・高欄詳細図、軒反り及び隅斗拱詳細図

また、薬師寺金堂復元設計案として

第0案 正面図

第0案 正面図、側面図

第1案 正面図、側面図

第2案 正面図、側面図

第3案 正面図、側面図

第4案 正面図、側面図

第5案 正面図、側面図

第6案 正面図、側面図

第7案 正面図、側面図

第8案 正面図、側面図

第9案 正面図、側面、断面図

第10案 正面図、側面図

設計案 断面図

設計案 立面図

以上川崎市立二本民家園「大岡實博士文庫写真資料目録Ⅱ図面資料及び摺拓本資料目録」より抜粋

これだけの熟慮を加えている。そしてその前提としての元薬師寺金堂の発掘調査や長年の膨大な文化財の研究を通して復元設計図が提供された訳であってその内容についても十分に検証することが求められるように思われる。

年月	西暦	工事名	所在地	工事期間	助手	構造設計	施工	構造種別
昭和45	1970	薬師寺 金堂	奈良県 奈良市	昭和45 基本設計のみ	松浦弘二	RC部分:松本暉	池田建設	RC造・木造